

＝ 主な内容 ＝

木造住宅の耐震診断	2
埋蔵文化財について	3
まちの話題	4・5
お知らせ	6～10
文化協会だより	11

NO.4

2006.7.10

～ 元気・交流・未来へ ふるさと東みよし町 ～



幼稚園児・古代米の田植え

広報
東みよし



木造住宅の耐震診断を ご検討ください

東みよし町では、二〇三〇年頃までに発生する確率が約四〇％程度と予測されている南海地震対策として、一定の条件を満たし、自己負担をしてくださる方を対象に、国等の支援を受けて木造住宅の耐震診断を実施します。

木造住宅の耐震性については、阪神・淡路大震災の被害例のとおり、古い木造住宅に大きな被害が発生すると言われていています。木造住宅で注意しなければならぬ点は、一つは建築年代が古く老朽化しているか、二つ目は作り自体が古くはないかという点です。住宅が建っている地盤や敷地の周囲等の条件も耐震性に大きな影響を与えます。

このようなポイントを評価するのが耐震診断です。ぜひ一度あなたも、お宅の耐震診断を受けてみませんか。



四、自己負担金

- ① 二戸建ての場合三千元
 - ② 長屋建ての場合六千元
- ※負担金は、(社)徳島県建築士事務所協会が派遣する「木造住宅耐震診断員」にお支払いくださいます。
- なお、診断に要する時間は概ね二時間程度です。

五、申込方法

- ① 耐震診断申込の際に、対象となるかどうかを確認しますので、住宅の建築年度や構造等を調べておいてください。
- ② 申込書は東みよし町役場三好庁舎建設課にあります。

〇耐震改修

耐震診断を実施し、「危険」と判断された住宅は、耐震改修について検討されることをお勧めします。その際、住宅改修を支援するため、県の支援を受けた補助制度を設けています。

- ① 対象住宅は、東みよし町(旧三好茂町・三好町を含む)が実施した耐震診断で「危険」と判断された木造住宅。
- ② 耐震改修に要する工事費の三分の二を補助しますが、その限度額は六十万円です。

〇耐震診断・改修の流れ

- ① 申込書の提出
建築時期が判別できる書類および写真を添付
- ② 町・建築士事務所協会から通知を送付
診断対象住宅には、町から選定結果通知書、建築士事務所協会から耐震診断員派遣通知書を送付
- ③ 耐震診断調査
日時を打合せの上、耐震診断員が調査に訪れ調査終了後自己負担金を支払う
- ④ 報告書作成
診断後、耐震診断員が報告書を作成し、第三者が再度チェック
- ⑤ 診断結果説明
耐震診断員が診断結果を説明に再度訪問
- ⑥ 耐震改修の検討
診断結果により、耐震改修を検討

窓口・お問い合わせ先

東みよし町役場三好庁舎建設課

電話七九一五三四二

防火管理者資格取得講習会

- ◇と き/8月24日(木)・25日(金)
- ◇と ころ/三好市池田町シンマチ1476番地1
三好市保健センター
- ◇申込期間/7月18日(火)~8月18日(金)
- ◇申 込 先/消防本部又は各消防署
- ◇お問い合わせ先/みよし広域連合消防本部 予防課

☎76-5119



阪神・淡路大震災で倒壊した木造住宅

徳島県埋蔵文化財

センターが調査を行いました

〔財〕徳島県埋蔵文化財センターでは、重要な遺跡があることが想像される場所の調査を、平成15年度から行っています。今回、東みよし町中庄の「合蔵廃寺跡」で調査が行われましたので、その紹介をします。

東みよし町立歴史民俗資料館には、合蔵廃寺跡から出土した古代の瓦が展示されています。この瓦からどんなことがわかるのか、最新の成果もあわせて紹介します。

この瓦は場所というと旧三加茂町・中庄地区で、家の裏側で井戸を掘っているときにまとまってみつかったものです。主な瓦の種類には、まず丸瓦と平瓦と呼ばれるものがあり、建物の屋根全体を覆っていました。丸瓦と平瓦の仲間には、屋根の軒先の特によく目立つ部分を大きく作った軒丸瓦と軒平瓦があります。その他、棟の頂上に乗せる熨斗瓦や鬼瓦もあるはずですが、今ところみつかりません。

瓦の中で、特徴がよく表れるのは軒丸瓦と軒平瓦です。どちらも型に粘土を押しつけてその凹凸を模様にしていきます。軒丸瓦の模様は蓮という仏教に関係の強い花を題材にしていて、真ん中には種(蓮子)を少し外側には二またに分かれた花びら(複弁の蓮華文)を、縁の部分には三角形(鋸歯文)を並べ



ています。軒平瓦は平行な筋が横方向にある簡単なもの(重弧文)です。こうした瓦の模様の特徴は「川原寺式」といいます。川原寺とは奈良県明日香村にある飛鳥時代の

代のお寺で、この文様の瓦が初めて使われたのでこのように呼ぶのです。川原寺式の文様の瓦はその後周辺地域に広まるのですが、そのうちの二つが合蔵廃寺というわけですが、蓮子の数や鋸歯文の描き方が違っていることが分かりました。このことから、川原寺式の瓦の文様が各地へ伝わっていくときにももとの文様がだんだん変化化したということになります。

では、この瓦はいつ頃作られたのでしょうか。それを知るためには、瓦を文様だけではなく作り方からも調べる必要があります。瓦のうち平瓦は、奈良時代は粘土を桶に巻き付けて数枚に切り分ける方法(桶巻作り)ですが、平安時代は一つずつを型に押し当てる方法(一枚作り)に変わります。合蔵廃寺の平瓦のほとんどは桶巻作りですが、少しだけ一枚作りが混じっていました。つまり、奈良時代に大部分の瓦が作られ、その後割れたりして足りなくなった分を平安時代に補充したと考えられます。



〔財〕徳島県埋蔵文化財センター 藤川智之

人権教育シリーズ

人権「みんなのバトン」

三十年ぶりに再会した同級生から手わたされた「心のバトン」…。いざ書きはじめると、何を書けばいいのだろうと悩んでしまいます。自分をかえりみず引き受けてしまったことを少し後悔しながらも、彼の「出会い」という言葉をキーワードに考えてみることにしました。

私は、仕事柄多くの子どもたちと出会ってきました。子どもたちとの関わりの中で、人として大切なことを教えてもらったり気づかせてもらったりすることがたくさんあったように思います。A君との出会いもそのひとつです。

A君は、人とのコミュニケーションがとりにくく、何かあると大声で泣いたり、時には自分で自分を傷つけるという自傷行為が見られることがありました。その日は、楽器の大きな音や自分がうまく吹けなかったことが苦痛だったのか、いっしょにも増して大声で泣き叫びながら部屋を飛び出していました。一人泣きながら、自分の腕を何度も何度も噛むA君。そんな姿を見ていたたまれなくなり思わず、「みんなA君のご大好きなんよ。もうやめよう。」と言って、力いっぱいA君を抱きかかえていました。それから、何かあるたびにA君の話をゆっくり聞き、彼の気持ちや行動を肯定的に受けとめるよう心がけました。(私にもっと専門的な知識があれば、他に適切な対応ができていたのかもしれないのですが…)私の言葉や思いを受けとめてくれたのが、それからのA君は徐々に落ち着きを見せ始め、自分の苦手なことにも一生懸命取り組むようになってきました。今思うと、A君は自分のことを理解し受け入れて欲しかったのではないかと思います。

人は、自分のことを認め、受け入れ、支えてくれる周りの人がいるからこそ、安心して自分らしく生きていけるように思います。でも、ややもすると固定観念や偏見から、その人自身を理解しようとしなないことがあるのではないのでしょうか。自分の気持ちや思いを伝えること。また相手の思いをしっかり受け止めること。そしてお互いに理解し合い、相手を思いやることの大切さをA君が改めて気づかせてくれたように思います。

私は、この文章を書きながら「心のバトン」を手わたしてくれた社会教育主事林さんの「人は人とのふれあいをとおして成長していくもの」という言葉をかみしめています。今、目の前にいる子どもたちやこれから出会う子どもたちとのふれあいを大切にしながら、自分自身も成長していきたいと強く思います。

Y・H

百歳おめでとうございます

6月10日、真鍋フジノさん(中ノ段)が満百歳の誕生日を迎えられました。真鍋さんは車いすで生活していますが自宅家族と会話をしたり、テレビを見たり元気な百歳です。

当日は町長らが訪問し百歳の誕生日を祝いました。

今後も健康に留意され、ますますお元気でお幸せな毎日を送られますよう町民の皆さまとともに心よりお祈り申し上げます。



献穀米の田植え式

6月11日(日)幡鉾泰治さん(共栄)所有の水田で今年の秋に皇居で営まれる新嘗祭にいなめさいに献上するお米の田植え式が行われました。

新嘗祭とは豊穰を祈願する祭儀のひとつです。当日は神事が行われた後、高校生が早乙女役を務めたほか、みのだ連のみなさんの阿波踊りで祭式に花を添えました。

秋の収穫までは何かと気苦労もあると思いますが立派な稲穂を実らせてほしいものです。

新茶売りに挑戦しました

5月30日(火)、吉野川ハイウェイオアシスで東山幼小学校の児童たちが新茶売りに挑戦しました。この新茶は自分たちで摘んだお茶を加工したもので、農産物の生産から販売までを勉強する社会体験授業の一環として行われているものです。



児童たちは接待係や会計係に分かれ、観光客らを見つけると新茶をふるまって、売り場を案内し、それぞれの役をてきぱきとこなしていました。児童たちの丁寧な言葉遣いに感心している方もいました。

用意してきた新茶をたくさん売り、子どもたちは満足の様子でした。

変わった瓦を発見!

「増田商店」さん(稲持西)に「うどんを食べる鬼瓦がある」と聞きつけ、行ってみると、家の裏側に凛々しい顔をした箸と茶碗を持つ瓦がありました。増田さんによると、130年ほど前、海産物店を営んでいた時にこの凛々しい瓦をつけたそうです。

吉野川に面した家の裏側が「稲持渡し」の船着き場で、稲持街道が広がり、多くの乗船客が行き交っていました。店のすぐ前は旧国道で、近隣の家も仕出屋、旅籠を営み、「地藏街」と呼ばれこの辺りは賑わっていたそうです。



